

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈1月10日（金）放送分〉

テーマ「奄美先人の知恵」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今週は、毎月第2週に、奄美の文化・暮らしにおける先人の工夫などを紹介する「奄美先人の知恵」の10回目です。

1月5日は「紬の日」でした。「紬の日」は、奄美の基幹産業である大島紬への認識を深めるとともに、大島紬の振興による豊かな街づくりを推進するために、市民がこぞって紬を着用し、そのよさを再認識することを目的とし、奄美市で昭和53年に定められました。

大島紬が産業として発展したのは、明治に入ってからのことです。それは、昔から伝わっていた「地機」が、永江伊栄温によって能率の高い「高機」に改善されたからだと言えます。従来の地機は全身の力を必要とし、女性にとっては重労働だったのです。また、慣れていないと、機の引き方の加減で糸が切れたり、折り目が揃わなかったりするなど、いろいろな弊害がありました。

大島紬の世界にあこがれ、島の人々の発展のために尽くしたいと考えていた伊栄温は、この織機を改善し、大島紬の生産に画期的な進歩をもたらしたのです。そして、伊栄温は名瀬に紬工場を開設して大島紬の生産を始めます。すると、新しい紬工場に刺激され、奄美の紬生産はどんどん増加していきました。

一方、大島紬の文様も、従来の縞模様や格子模様などの幾何学的な柄から、花や鳥などの曲線を織り出す方法が考えられていきました。絵の上に糊つけした絹糸を並べて墨で印をつけ、手括りで緋を作り、染色して絵を織り出す方法を、登山伊次郎が苦心して研究し、考案したのです。

しかし、経糸と緯糸でいろいろな線をつくるには、いく通りにも染め分けなければならず、その並べ方にも複雑な計算が必要でした。これまでに身につけた技術をすべて使っても、満足のいく文様を織ることのできなかつた永江伊栄温は、仕事場にふらっとやってきた、おいの昇治太郎にそのことを話しました。伊栄温は、自分が永年かかって織り出せない文様を、治太郎が簡単にできるわけがないと、たいして期待もしていませんでした。

すると、二、三日たって、治太郎がにこにこ笑いながらやってきます。初めに白い糸だけで織り、その上に墨で好きな文様を書く。文様を書いたら、経糸と緯糸をほぐして一本

の糸にもどし、新しい白糸の束に重ねて、墨のついたところをくくって染めると、同じ文様を好きな分だけつくれると言うのです。「なるほど、そんな簡単な方法があったのか。」と、伊栄温はすっかり感心してしまいます。また、下絵を紙に書いて、それを版木^{はんぎ}に彫って文様の型^{かた}をつくり、経糸と緯糸を台の上に並べる。そして、版木に墨をぬって押しつけ、下絵糸をつくる方法まで考えてきたのです。版木さえあれば、いつでも同じ文様の紬がつくれるということです。昇治太郎は、後に「締機^{しめばた}の専門」と言われるようになりますが、なんと斬新なアイデアなのでしょう。

丈夫で長持ちする着物から、着る人に喜びを与える美しい文様入りの大島紬は、こうして生まれていきました。

そして、このようにしてできた美しい大島紬は、たくさんの織り子たちにも明るい希望を与えました。それまで、織り子たちは、薄暗い土間で、朝から夜遅くまで紬を織り続けていました。産業も発達していなかったころは、織り子のもらうお金もごくわずかなものでした。織り子たちが、自分から進んで新しい紬の柄を織りだすことはなかったのです。しかし、永江伊栄温の名前が高まるにつれて、織り子たちには工夫し、考えることの大切さが伝わっていきました。新しい柄を生み出す楽しさを知り、新しい文様を織り、それが評判になることが、織り子たちに大きな励みを与えていったのです。

同時に、名瀬では「大島紬同業組合」も結成され、組合が行う厳格な製品検査により、大島紬全体の品質を守り、大島紬の評価が全国で高まっていくようになりました。

現在も、奄美大島には「大島紬」が生き続けています。これまで、多くの先人から受け継いできた、奄美の貴重な芸術・技術を保つために、そして、新しい大島紬を創り出すために、多くの方々が汗を流しています。「紬の日」をきっかけに先人の努力を再認識し、それを語り継ぐことが、多くの人々に大島紬のよさを広げることにもつながっていくのではないかと感じます。

今回紹介した内容は、茂野^{しげの}幽考^{ゆうこう}著『奄美^{せんしよくし}染織史』、重村^{しげむらと}斗志^し乃利^{のり}著『大島紬誕生秘史』に詳しく記されています。また、永江伊栄温については、奄美群島日本復帰の節目の年に発行されている、『郷土の先人に学ぶ』という児童・生徒用の副読本にも紹介されています。大島紬のよさを知るときに、奄美図書館の書籍も参考にいただければ幸いです。これまで以上に、大島紬に対する深く、熱い思いをもつことができるかもしれません。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。